

氏 名	たかぎ まきこ 高木 繭絹子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 1 1 2 2 号
学位授与の日付	令和 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 建築学専攻
学 位 論 文 題 目	シャルル・ブティエのテキスト「教会堂」と 19 世紀末コー チシナ・サイゴンに建ったパリ外国宣教会の建築
審 査 委 員	(主査)教授 西田 雅嗣 教授 阪田 弘一 准教授 大田 省一

論文内容の要旨

本学位請求論文は、パリ外国宣教会宣教師シャルル・ブティエが、1911 年のパリ外国宣教会年報に掲載したテキスト「教会堂」の記述内容を分析し、同テキスト中に取り上げられた諸建築について、同テキストの記述、現地調査、古写真等のさまざまな図像資料、同時代文書史料などを多面的に検討し、それらの建設過程や建設当初の建築の姿を明らかにし、19 世紀末から 20 世紀初めにかけてヴェトナム南部コーチシナに建設されたカトリック建築の実態を克明に明らかにした論文である。【序章】で研究の目的・方法、資・史料、背景を述べた後、【1 章】は、ブティエのテキスト「教会堂」を分析する。知る人の少ないこのテキストが、西洋建築としての様式、気候風土に即した建築の工夫や建設法、それらに対応する建築意匠や構造を論じていることを指摘し、本論文【1 章】以後の各章が取り上げる建物と論すべき観点が示された、南部ヴェトナムでのパリ外国宣教会の建設活動を知る上での重要文献であることを論じる。本論文【2 章】以下【5 章】までが「教会堂」に取り上げられた各建築物を検討する各論で、【2 章】ではサイゴン城塞大通りカトリック施設群の聖ヨセフ神学校を取り上げ、現地調査と古写真や文書史料からの知見を総合して、現在の神学校校舎は創建時の建物ではなく、礼拝堂も大きな増改築の結果現在の姿になっていることを明らかにした。【3 章】は同カトリック施設群のシャルトル聖パウロ修道女会修道院にかつて存在したサント＝アンファンス修道院の建築の姿を明らかにし、解体までの変遷を辿る。当時ヴェトナム随一と言われながら解体されたネオ・ゴシック様式の木造尖塔をはじめとする建築様式や装飾の問題が議論され、ヴェトナムにおける西洋様式の折衷意匠の嚆矢としての姿を論じる。【4 章】はサント＝アンファンス修道院跡に建設されたシャルトル聖パウロ修道女会修道院の建築について、現存する三棟の建築の姿の変遷を辿り、現存する建築が、一部の外観の変化を除き、ブティエら宣教師建築の特質や工夫を残す建築であると同定する。【5 章】は、ブティエが「教会堂」で大きく取り上げる彼が設計したサイゴン・カウコー教会堂の創建当初の姿を論じる。全世紀半ばまで現存していた創建教会堂の復元が、「教会堂」の記述の他、古写真や関係事例をもとに、ブティエが力説する木造小屋組や組積造の壁に着目して、技術的工夫の実際と復元平面図で示される。【結章】では【2 章】～【5 章】で得た知見を、再度テキスト「教会堂」と比較考察し、宣教師が持ち込んだ西洋建築が現地の実情に適合するよう姿を変えて行く実態を、宣教師が

示す西洋建築の観点から、植民地建築の一つの姿として総括する。

論文審査の結果の要旨

宗主国が建設した植民地建築は、現地の建築のあり方が列強との力関係の中で西欧化されるプロセスの雄弁な証人である。ヴェトナムへのカトリック宣教会の進出に伴う建設活動と建てられた建築の実態を扱う学術的研究は、ローカルな建築と西洋建築が融合したヴェトナムに独特な姿を見せる北部の教会堂建築研究では行われているが、外観が西洋建築の直写にも見える南部の宗教建築についての研究はほとんどなく、現存建築の建設経緯や今に至るまでの増改築・再建の経緯、消失建築についての実態等もあまり知られていない。本論文はヴェトナム南部に着目し、そうした未開の研究領域に果敢に挑んだ研究である。本論文の学術的意義は、パリ外国宣教会年報に掲載されていた宣教師建築家ブティエが書いた「教会堂」と題されたテキストの発見とその建築史上の重要性の評価、そして、消失建物も含め、「教会堂」で論じられている諸建築の姿の同定とそれらの沿革の解明を、様々な形で残る史・資料と現地踏査の結果を駆使し、一定の信頼度を持って成し得たことにある。

創建当初の姿を復元的に明らかにし、現存建物との比較から意匠の変遷を逐一辿った【2章】～【5章】は各教会堂の基本的なモノグラフ研究として今後の研究の基盤になる学術成果である。本論文の考察の出発点に置かれたブティエのテキスト「教会堂」を補助線として引くことで、宣教師が示す西洋建築の観点からの植民地建築の有り様が、宣教師たちの意図や目論見と共に、彼らの計画や実際の建設活動、あるいは建設された建物の観察に即して具体的、実証的に詳らになり、19世紀末南部ヴェトナムのカトリック建築のモノグラフのコンピレーションに止まらない価値を本研究は備えることとなった。今まで不明であった建物の姿の復元も含めて、現存建築に関しても、我々が知ることのなかった今に至るまでの建て替えや改築の変遷の様子を詳しくするモノグラフィックな本論文の功績に加え、テキスト「教会堂」の読解と個々の建築の具体的検討から得られる知見との比較検討は、西洋建築とローカルな建設の間に立ち現れる植民地建築の特質を浮き上がらせる注目すべき点である。

19世紀フランスの最先端ネオ・ゴシック様式の尖塔を有していたサント＝アンファン修道院、外観は西洋のロマネスクやゴシック様式でありながら、シロアリ対策や軟弱地盤への対応からフランスにはない建築の工法を強いられた構造、暑さと湿気対策から「ヴェランダ」を持つ教会堂形式の存在等々の個々の建築が見せる特筆すべき様子を、本論文は、テキスト「教会堂」から宣教師建築家たちの意図を読み込みつつ建物に即して考古学的に論じている。手薄だった南部ヴェトナムのカトリック建築研究に一石を投じ、今後の展開が期待できる学術的に価値のある要素を多く含む論文である。

本論文の主要部分はレフェリースシステムの確立された学術誌に、学位論文公聴会時点で以下の①②③の査読有り単著論文3編が発表されている他、④の査読有り単著論文1編の掲載も決定している。

- ① 高木蘭絹子「シャルル・ブティエ著「教会堂」について」『日本建築学会計画系論文集』第88巻・第814号、p.3376-3387、2023年12月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.88.3376>

(第1章)

- ② 高木繭絹子「サイゴン・聖ヨセフ神学校の建築についてーサイゴン・城塞大通りのカトリック施設群」『日本建築学会計画系論文集』第88巻・第808号、p.1997-2008、2023年6月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.88.1997> (第2章)
- ③ 高木繭絹子「サイゴン・サント＝アンファンス修道院の建築についてーサイゴン・城塞大通りのカトリック施設群」『日本建築学会計画系論文集』第89巻・第815号、p.122-133、2024年1月、DOI: <https://doi.org/10.3130/aija.89.122> (第3章)
- ④ 高木繭絹子「サイゴン・シャルトル聖パウロ修道女会聖パウロ修道院の建築についてーサイゴン・城塞大通りのカトリック施設群」『日本建築学会計画系論文集』第89巻・第818号、頁数未定、2024年4月発行予定 (第4章)